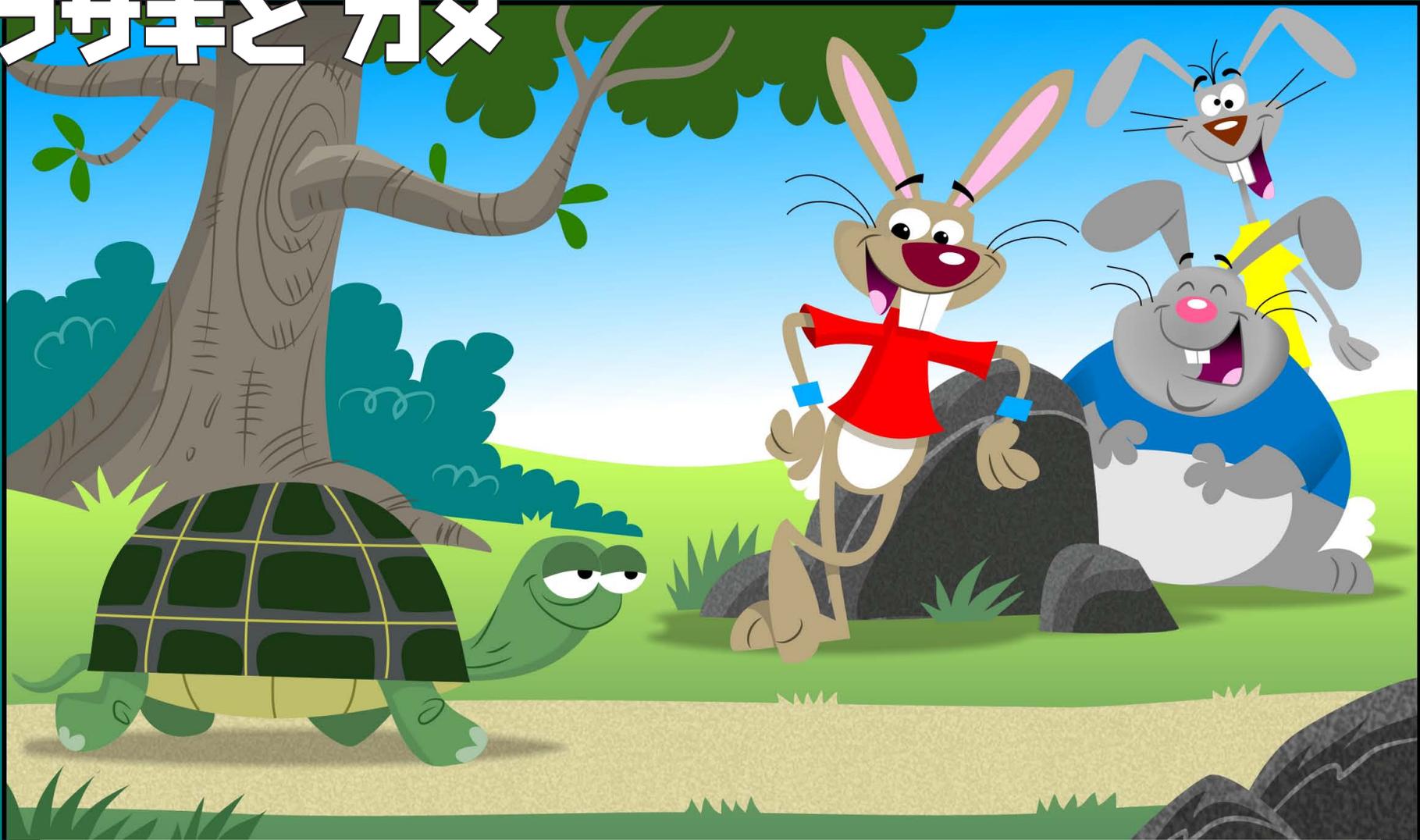


ウサギと カメ



あるところに、とてもいばりやのウサギがいました。ウサギは、すみかの草原を^{くさばら}きど^がおでぶらつくのが大好きでした。みんな、そのウサギが、自分が最高のウサギだと思^{おも}っているのを知^しっていました。

そのウサギが、ほかの何^{なに}よりもじまんにしていたことがありました。それは、強い後^{つよ}ろ^{うし}足^{あし}に恵^{めぐ}まれていたことです。つまり、足^{あし}が非^ひ常^{じょう}に速^{はや}かったのです。ウサギは、事^{こと}あるごとに、仲間^{なかま}たちにも自^じ分の速^{はや}さを見^みせつけて

いました。そのウサギより速^{はや}く走^{はし}れるものは、いませんでした。でもそれは、ある日^ひカメに出^で会^あうまでのことでした。ウサギがいつものように仲間^{なかま}たちにじま^まんをしていると、のっそりと、カメがやってきました。

「急^{いそ}げや、急^{いそ}げ、お^おいぼれガメやーい！」ウサギがあざけて言^いいました。「そんな^{ある}にのろ^ろろ歩^あいてると、草^{くさ}のほう^はが速^{はや}くのびて、周^{まわ}りが草^{くさ}だらけにな^なっちゃうぞ〜！」



「走りたいだけ、走るがいいわい。」と、カメが 答えました。
「わしは、自分の 行きたい 所に 十分 早く 行けるからの。
心配は ご無用じゃ。」 そう 言いながら、カメは ウサギを
頭の てっぺんから つま先まで、じろじろと ながめました。
「それだけではないぞ。おまえさんが どんなに 速いと
おも 思っても、わしは おまえさんよりも、目的地に 早く
着けるわ。」
それを 聞いて、ウサギは ふき出してしまいました。
「ぼくよりも 早くだって? そりゃあ、見てみたいもんだ。」
ウサギは カメに 競走を 申しこみました。

やがて、競走の手はずが 整いました。次の 日になると、
ウサギと カメの 競走を見ようと、みんなが 集まって来ました。
「5、4、3、2、1、スタート!」 オンドリが さげびました。
その しゅんかん、ウサギは もう、丘の 向こう側に すがたを
消していました。
年取った カメが、まず 最初の 一歩を ふみ出し、それから
また 一歩と 道を進み始めると、見物客たちは 手を たたいて
歓声を あげました。
カメは、全く よそ見を せず、目の 前の 真っ直ぐな 道だけを
見つめていました。



一方、ウサギは、道を突進していきました。ウサギが大急ぎで走って行ったのは、だれの目にも明らかでした。勝つのはウサギに決まっています。カメは、ウサギのずっと後ろのほうで、ゆっくりですが着実に進んでいます。

やがて、ウサギは競走の中間点にきました。「まだまだ、時間はたっぷりあるぞ。」ウサギはひとり言を言いました。「もう、あののろまな年寄りガメを、何キロも引きはなした

はずだ。ここらで、昼ねだってできるぞ。その後で残りを走らせたって、あのカメに勝つくらいの時間は十分あるさ。」

そこで、ウサギは木の下にすわり、ねてしまいました。何時間もたつと、カメが丘の向こう側にあらわれました。カメが丘を下りてくると、ウサギがそこにすわって、ぐっすりとおねむっていました。カメはウサギをちらっと見ましたが、何も言わずに、てくてくと歩き続けました。



ウサギがはっと目を覚ました時、もう日はしずみかけて
いました。あくびをしながら手足をのばしましたが、カメの
すがたがどこにも見えないので、満足気でした。「競走に
勝つのに時間はたっぷりあるぞ！」ウサギはうれしそうに
ひとり言を言いました。

道を勢いよくすっ飛ばしていきましたが、ウサギはまもなく
目に入ってきた丘の向こう側の光景に、びっくりぎょうてん
しました。自分よりも前に、カメがあと数歩でゴールを

き切ろうとしていたのです！ つやつやしたカメのこうらが
ゴールのテープを切ると、観客は大歓声をあげ、
オンドリがカメの勝利を宣言しました。

ウサギがハーハーいいながらゴール地点に追い付くと、
カメがにっこり笑って言いました。「わしはおそいかも
しれんが、目はいつもゴールに向けておる。何のものにも
きをそらされんようにな！」